慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大西広『マルクス経済学』小考
Sub Title	On Hiroshi Onishi's "Marxian economics"
Author	寺出, 道雄(Terade, Michio)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2013
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics=Mita journal of economics). Vol.105, No.4 (2013. 1) ,p.755(233)- 759(237)
JaLC DOI	10.14991/001.20130101-0233
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20130101-0233

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」105 巻 4 号（2013 年 1 月）

研究ノート

大西広『マルクス経済学』小考

寺　出　道　雄

（1）　はじめに

本稿では，

大西広『マルクス経済学』慶應義塾大学出版会，2012 年，

について検討する。

本稿は，きわめて簡略なものであり，本来は「書評」とすべきである。しかし，本誌では，慶應義塾経済学会会員の著書への「書評」は，同会会員ではない執筆者に依頼することになっている。あえて，「研究ノート」として投稿する所以である。

なお，以下では，上記の書物に一応は目を通している読者を想定する。そうしないと，本稿は，逆に，長大なものとなってしまうからである。

（2）　問題

1　問題を，ただ 1 点に限定しよう。

『マルクス経済学』（以降「同書」と呼ぶ）は，「マルクス経済学」の中級のテキスト・ブックとして書かれた（ii 頁）という。そうした同書の核心は，最適制御模型を用いて，いわゆる「資本主義から社会主義・共産主義への移行の必然性」を説いている点にある。

「資本主義から社会主義・共産主義への移行の必然性」の問題は，他ならないマルクスの『資本論』以来，さまざまに議論されてきた。しかし，その問題について，数学的な論証に成功したものがあるとは，知らない。したがって，同書は，きわめて野心的な試みであることになる。同書が，「資本主義から社会主義・共産主義への移行の必然性」を数学的に論証するのに成功しているなら，それは，文字通りに，「21 世紀の『資本論』」となるであろう。

ところで，同書においては，社会主義・共産主義とは，経済が定常状態にあることであると，定義されている。

この定義は，明らかにマルクスのものとは異なる。その内実は，むしろ，マルクスにとっ

ての「敵」であった，ミルの議論に近いであろう。事実，20 世紀におけるマルクス主義運動の「正統派」であった「共産主義インターナショナル」（「コミンテルン」）の「綱領」（1928 年）には，次のように書かれている。

「共産主義世界体制」のもとでは，「社会のあらゆる物質的資材が計画的に使用され，経済は，生産力のかぎりない，計画的な，急速な向上をもとにして，なめらかに発展する。」[(1)]

「綱領」前のロシア革命も，「綱領」後の中国革命も，そうした「発展」（成長）する経済を目指しておこなわれたのである。

もっとも，同書では，「マルクス」のではなく，解体（1943 年）されてしまったコミンテルンとも無縁な，「マルクス派」である著者の議論が展開されているのだから，その点は，これ以上は，問わないでおこう。

なお，筆者自身は，環境・資源・食糧といった制約条件を考慮すれば，物的な財の生産に限れば，経済は，いずれ定常状態に落ち着くしかないし，むしろ，その方が望ましいと考えている。しかし，そうした筆者の見解と同書の主張とは，まったく異なるものである。

2　それでは，以上のような意味において，同書は，「資本主義から社会主義・共産主義への移行の必然性」を数学的に論証することに成功しているであろうか。筆者の私見によれば，「成功した」といえるためには，少々の説明不足があるようである。

同書は，「資本主義から社会主義・共産主義への移行の必然性」の議論を，まず，以下のような最適制御の問題（123 頁）を解くことでおこなう。

そこで，U（社会の効用），Y（消費財の生産・消費量），K（資本量），s（労働人口の消費財生産と生産財生産とへの分割割合）である。やや読みにくいかもしれないが，ρ は，自然対数の底 e への上添えであり，それは，時間割引率である。α と β は正であり（コブ・ダグラス型），その和は 1 である。また，A（消費財生産の技術係数），B（生産財生産の技術係数），L（労働人口），δ（資本の損耗率）は，正で一定である。

$$\max \mathrm{U} = \int_0^\infty \mathrm{e}^{-\rho t} \log \mathrm{Y}(t) \mathrm{d}t \qquad ①$$

s.t.

$$\mathrm{Y}(t) = \mathrm{AK}(t)^\alpha (\mathrm{s}(t)\mathrm{L})^\beta \qquad ②$$

$$\dot{\mathrm{K}}(t) + \delta \mathrm{K}(t) = \mathrm{B}(1 - \mathrm{s}(t))\mathrm{L} \qquad ③$$

その問題を解いた結果は，図 1（125 頁より複写）のようになる。また，その結果の経済学的な含意は，図 2（139 頁より複写）のようになる。

最適制御を用いた議論が，長期的な視野をもった合理的な計画者の存在を前提することは，いうまでもない。もちろん，同書は，その点を十分に考慮している。

したがって，同書では，さらに，「分権的市場モデル」を検討し，その結果，

$$\dot{\mathrm{K}} = \mathrm{BL}_1 = \mathrm{B}(1 - \mathrm{s})\mathrm{L} \qquad ④$$

という，上記①～③式である，「本来の「マルク

(1)　日本共産党中央委員会編（1967）175–6 頁。

図１　資本蓄積によって長期均衡に至る移行ダイナミックス

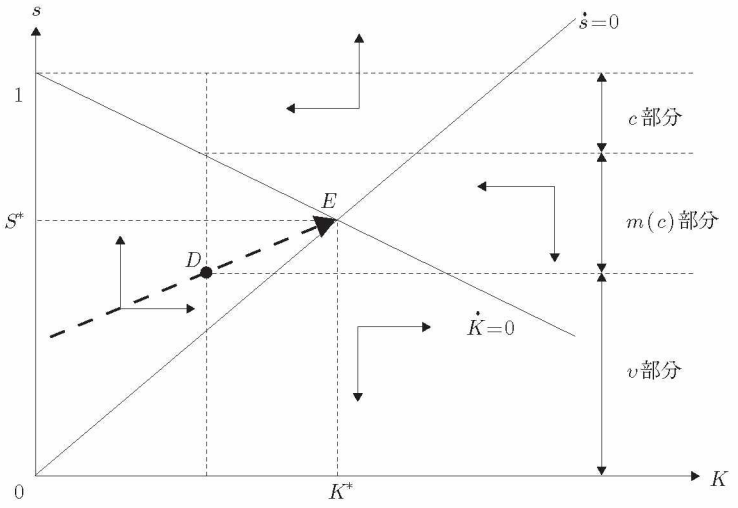
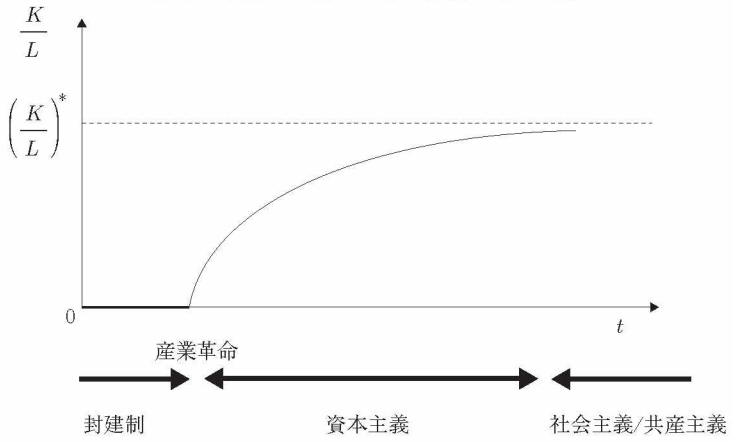


図２　産業革命以降の資本蓄積の時間経路



ス派最適成長モデル」の資本蓄積方程式（……ただし，ここでは簡略化のため減価償却は無視されている）とまったく同じ」（200 頁）である「資本蓄積方程式」が導出される，とする。なお，④式には，(t) は添えられていない。

すなわち，「分権的市場モデル」における，「資本蓄積方程式」④と，長期的な視野をもった合理的な計画者の存在を前提した場合の「資本蓄積方程式」③とは，「まったく同じ」なのである。したがって，「分権的市場」において資本蓄積がつづけられれば，「必然的」に，資本主義は社会主義・共産主義に移行していく，という訳である。

いかなるマルクス主義者とて，いまさら「暴力革命」を目指している訳ではあるまい。しかし，これほど完璧な「平和革命」論はないであろう。なぜならば，合衆国の例でいえば，現在の民主党政権どころか，より市場重視的

である共和党政権がつづいても，やがて，その党名の「和」を「産」に変えなければならなくなってくるのだから。

3　しかし，こうした議論には，前記のように，若干の説明不足があるように思われる。

④式で資本の損耗を考慮すれば，確かに，③式になる。しかし，③式で，単純な移項をおこない，④式と同様に，(t) をはぶけば，

$$\dot{K} = B(1-s)L - \delta K \qquad ⑤$$

となる。その時点における生産財の生産が，生産過程における生産財の損耗に等しくなれば，右辺はゼロとなり，当然，左辺もゼロとなる。つまり，マルクス的にいえば，「拡大再生産」は止み，「単純再生産」に移行する。経済は定常状態に入るのである。そして，それは，同書での定義によれば，社会主義・共産主義への移行なのである。

ここで，説明不足は，3点ある。それを，同書の著者への質問の形で述べておこう。

1）そもそも，「本来の「マルクス派最適成長モデル」」は，実は生産財生産部門の需給均衡式に他ならない，その制約条件の1つである③式ないし，それと「まったく同じ」⑤式として，定常状態への到達が直感的には自明であるように，構成されていたのではないであろうか。もちろん，すべての経済模型は，その前提のうちに，結論を陰伏させている。しかし，③式ないし⑤式は，あまりにも明白に，経済の定常状態への到達という，重要な結論を予想させてしまうのではないか。

2）「分権的市場」経済を，口の悪い「マルクス派」は，「生産の無制限的な拡大」の意志が経済を支配する「資本制経済」であるとする。そうしたら，「マルクス派」は，③式すなわち⑤式のような「資本蓄積方程式」を，「資本制経済」的なものと見なすであろうか。

3）その点を言い換えてみよう。図1の位相図が示すのは，サドル・パスである。「生産の無制限的な拡大」の意志が経済を支配する「資本制経済」が，同書が主張するような軌跡を描いてくれるだろうか。「資本制経済」がそうした軌跡を描くとすれば，それは，「軌跡」ではなく，「奇跡」ではなかろうか。(2)

(3)　おわりに

以上，同書の著者に対して礼を失する表現もあったろうかと思う。その点は，深謝したい。

もちろん，筆者は，同書における「マルクス派」と「新古典派」を統合する，という試みには，多大な敬意をいだく。また，「マルクス派」であれ，「新古典派」であれ，技法上の問題を除けば，同時にディープ・エコロジストである人々によって，経済全体の定常状態を目的とするという議論はおこなわれてきたのあろう。そうした中での同書の試みにも，多大な敬意をいだく。

(2)　仮に，「資本主義から社会主義・共産主義への移行」が，同書での議論のように「必然的」であるとする。そうするなら，「本来の「マルクス派最適成長モデル」」は，「新古典派」模型の1変種であり，「マルクス派」模型ではなくなってしまうであろう。

ただ，筆者は，同書には，やや説明不足の点があることを述べて，「マルクス派最適成長論」の，より分かりやすい説明を求めただけである。同書が，テキスト・ブックとして書かれただけに，そうした説明の必要は，喫緊のものであると思われる。

なお，高橋（2012）は，本稿より詳細な「マルクス派最適成長論」の検討である。線形微分方程式を用いる工夫によって議論がおこなわれていること，きわめて分かりやすい数値例があげられていることの，2点において，興味ぶかい論考である。

最後に，同書と高橋（2012）が掲載された『経済論叢』をご恵投下さった，大西氏に感謝したい。

（経済学部教授）

参　考　文　献

日本共産党中央委員会編（1967）「共産主義インタナショナルの綱領」『日本共産党綱領集』日本共産党出版部。

高橋勉（2012）「マルクス派最適成長論における基本モデルの検討――経済成長の限界と最適労働配分について――」京都大学経済学会編『経済論叢』第185巻，第2号。